愛知教育大学研究報告，49（人文・社会科学編），pp. 121～126, March, 2000

ドイツ語日常語の特徴
――Umgangssprache に関する最近の研究から――

田　村　建　一

Kenichi TAMURA

（日本語教育選修）

1　は　じ　め　に

1960年代後半にドイツ語研究の中に社会言語学的アプローチが導入されて以来，ドイツ語内部に存在するさまざまな言語変種とそれら同士の関係に大きな関心が払われるようになったが，なかでも方言と比べそれまであまり研究の対象にされてこなかった，いわゆるUmgangssprache の実態に関する調査，研究が飛躍的に増えている。Umgangssprache という概念は，その下位区分の仕方や都市方言との区別の問題も含め，いまだに厳密に規定されたものではなく，研究者の立場や研究の対象とされた地域によって微妙に異なった解釈がなされているが，一般に共有されている解釈としては次のようになる。すなわち，Umgangssprache とは標準語と伝統的方言という確固とした体系をもつ二つの言語変種の中間に位置づけられる日常的な変種を大まかに指すもので，いわばこの二つの体系の間で連続体を構成している。それは実際の現れ方としては，話者が属する地域や社会階層，発話の状況などに応じてさまざまな形をとり，全体として，より高い階層が私的状況で，より低い階層がより公的な状況で話す言語変種である[1]。以下，Umgangssprache は『ドイツ言語学辞典』（川島淳夫ほか編，紀伊国屋書店，1994年）に従って日常語と訳す。

地域によって異なるものの，ドイツ語圏の国々において，学術講演やテレビのニュース番組などの公的な使用領域ではなく，例えば道端や電車の中での知らない者同士の会話で耳にする，あるいは場合によってはホテルのフロントのような半公的な使用領域で耳にするドイツ語は，文法書や学習書に記述されている標準ドイツ語などではなく，日常語である。それゆえ，日常語はドイツ語教育の中で重要な位置を占めるべきものなのであるが，日常語そのものが体系的に捉えにくいこともあって，少なくとも日本の大学教科書レベルではまだそうなっていないのが現状である。

本稿は，最近のいくつかの研究に基づいて日常語の全体像を考察しながら，日常語の中でも特に標準語なみの扱いをされ，従ってドイツ語学習者が学ぶ必要のある変種の特徴について論じるものである。

2　方言と日常語

日常語には地域方言の要素が取り入れられるので，ハンブルクを中心とする Missingsch やルール地方の Ruhrdeutsch など特定の地域の日常語を指す語が存在することからも分かるように，実際にはさまざまな日常語が各地で用いられている[2]。一般に，それらの上に位置づけられるような，ドイツ語圏全体に共通の日常語は存在しないと考えられている（Löffler 1994: 108）[3]。

全体として，標準語の浸透による方言の衰退が相対的に早かった北ドイツでは日常語が標準語に近い形態をとるのに対し，現在なお方言の威信が強いドイツ語圏南部の日常語は方言に近いと言われている（Braun 1993: 25-26; Conrad 1980: 383）。例えば，ドイツ南部バーデン・ヴュルテンベルク州のある村で使われているさまざまな言語変種を1960年代に調査した Engel の挙げる例文の中から，村の中でも社会的地位の高い人たち（医師，聖職者，教師など）に特有の日常語（Honoratiorensprache）の例を挙げると次のようである（Clyne 1995: 93-94から引用，括弧内は標準語）。これは州都シュトゥットガルトの日常語に倣った広域的な日常語であるにもかかわらず，かなりシュヴァーベン方言の要素を含んでいる。

i hab en Mordsdurscht, aber Biir mag e net.
(Ich habe einen großen Durst, aber Bier mag ich nicht.)

's geet ə beeser Wind heit, aber im Bus isch s warm. (Es geht ein böser Wind heute, aber im Bus ist es warm.)

標準語から方言にいたる言語変種の連続体の区分に関しては，調査地，研究者によってさまざまな捉え方がなされている。例えば上記の Engel は，標準も含めると4種類の変種（標準語，上の例に挙げた広域的日

常語，より方言に近い日常語，方言）を区分するが，他方，5種類の区分をする研究者もおり，しかもその中で，フランクフルトを調査したVeithの区分（1980年代）と，旧東ドイツの北部を調査したSchönfeldの区分（1970年代）とでは，微妙な相違が見られる。表1はこの三者の区分の仕方の対応関係を示したものである[4]。

表1　言語変種の区分（○が変種の存在を表す）
E＝Engel, V＝Veith, S＝Schönfeld

	E	V	S
標準語	○	○	○
標準語に近い日常語	○	○	○
中間的な日常語		○	
方言に近い日常語	○	○	○
日常語の影響を受けた方言			○
方言	○	○	○
［変種の数］	〔4〕	〔5〕	〔5〕

このように言語変種の連続体は地域によって異なった実態を示すのであるが，これに加えて，次の二つの点も日常語の体系を正確に捉えることを困難にしていると思われる。第一に，変種の選択は階層や発話状況と結びついており，個々人はそれに応じていくつかの変種を使い分けることになるが，実際には変種間のちがいがそれほど明確に意識されているわけではない。

日常語が確固とした体系をもつものとして認識されていないことは，上記のEngelと同じシュヴァーベン方言が話される地域にあるテュービンゲンで大学生を対象に日常語の調査を行ったOtomo（1990）が指摘している。それによると，インフォーマントに日常語の例文を書かせたところ，日常語ではないものを誤って挙げたケース（例えば‘Ihm ist schlecht’のような標準語的なものや，‘Schwesterlein’のような個人語レベルで慣習的なものなど）が一人平均約20%に上った。

第二に，上と関連して，日常語と他の言語変種の関係はつねに流動的である（Weisgerber 1996: 262）。日常語の発生がそもそも，産業化を中心とする近代社会の発展の中で，人間の移動が活発になり，広域的なコミュニケーションの必要性が高まってきたことによって，標準語の影響を受けながら，特に地域の中核となる都市において発生し，周辺の地域へ広がっていったものなので，マスメディアの発展などによりコミュニケーションの形態が急激に変化しつつある現在においても，日常語がかなり変化することは充分考えうることである。

ここで留意しなければならない点は，日常語は，標準語の浸透とともに，方言話者が標準語を習得する過程で方言の干渉を受けて成立したのではない，ということである。それは例えば次のことから理解される。Mihm（1990）が考察の対象としているBerlinischとRuhrdeutschは，低地ドイツ語の地域に発生した日常語であるが，その中に見られる低地ドイツ語的な要素を色濃く残している語，すなわち第二次音韻推移を経ていない語は，非常に頻度の高い一部の語だけであって[5]，他の該当する語の子音はすべて標準語と同じ子音に変化している。これが意味するのは，標準語の不完全な習得などではなく，意図的な方言的要素の保持である。つまり，方言話者が日常語に移行するさい，かつて方言が担っていたコミュニケーションにおける人間的な温かみや親しさ，気楽さを表すマーカーとして，方言の中のよく耳にする中核的な語が日常語に継承されたのである（Mihm 1990: 56）。日常語が継承したこのような機能のゆえに，標準語話者が場面に応じて日常語に合わせようと努力するケースもよく見られる（Weisgerber 1996: 262）。

Auer（1997）は，ドイツ再統一前後の時期に上部ザクセン地方からザールブリュッケンやコンスタンツに移住した，そもそも方言話者であった人たちの発話における音韻上の変化について，移住後二年間に渡って調査した結果や，コンスタンツ市民における都市方言の変化を調査した結果に基づいて，現在においても，言語変化が必ずしも標準語の方向に向かって進むわけではなく，標準語と並んで，広域的な地方変種，例えばコンスタンツにおいては西南ドイツ共通語とでもいうべき変種が，方言話者に対してかなりの影響力をもつことを論じているが，こうした変種は明らかに本稿でいう日常語を指すものである[6]。

なお，ここまで方言と日常語を中心に述べてきた言語変種間の関係は，ドイツとオーストリアの状況に基づくものであって，ドイツ語圏スイスには当てはまらない。スイスでは方言の威信がきわめて強く，1930年代以来の方言育成の結果，現在ではすべての階層で，話し言葉においてはラジオ放送や州議会などの公的な使用領域でも方言が用いられ，また広告や私的な手紙など一部の書き言葉にまで方言が進出しているため，日常語のような中間的な変種は存在せず，標準語と方言の間で完全な切り替えが行われる（Löffler 1994: 146-148; アモン 1992：124-125）[7]。

スイスドイツ語のように，本来なら標準語が担う使用領域にまで勢力を広げつつある方言をKloss（1978: 58）は「拡充方言（Ausbaudialekt）」とよぶ。ドイツやオーストリアでも1970年代を中心に，地域文化の見直しと復興を図る運動の盛り上がりに呼応する形で，各地の方言による歌や文学作品がさかんに作り出されるなど，いわゆる「方言の波（Dialektwelle）」とよばれる現象が起こった[8]。これによって特に若い世代において，方言に対するポジティブな態度をとる人が増加しはしたが（Clyne 1995: 110-112），しかしこの方言復興運動の担い手は，主として日常生活においては方言使用とは無縁な，学歴の高い中流階層であったことか

らも分かるように，この運動の後，方言の使用が増加したとはいえない(アモン 1992：125)。また，運動家たちが方言と見なすものが，実際には方言に近い日常語である場合もあった（Barbour/Stevenson 1990: 146)。

3 標準語化プロセスと日常語

日常語の発生は，標準語の浸透とそれにともなう方言の衰退と密接に関わっている。そこで次に，国家あるいはそれに準ずる民族的な共同体の中に標準語が形成され，広められていくプロセスを考察してみたい。Mattheier (1997) によれば，ドイツ語も含め現代ヨーロッパ諸語に共通に見られる標準語化のプロセスは次の4つの段階に分けられる。

1）ラテン語あるいは教会スラブ語といった超国家的な書記言語と並んで存在していたさまざまな地域的言語変種の中から一つの変種が共同体にとって規範的なものと見なされるようになる。この規範的変種の選択をめぐってはかなりの論争が生じる（例えば，16・17世紀のイタリアでの言語論争)。

2）規範化された言語変種の語彙，文法，正書法が整備される。このいわゆるコード化の担い手は，イタリアのアカデミア・デラ・クルスカのような学者・文化人のグループの場合と，フランスのアカデミー・フランセーズのような国家によって権威づけられた組織の場合がある。ドイツやオランダでは前者のタイプ，スペインやスウェーデンでは後者のタイプがモデルとされた。

3）このようにして成立した標準語が地域的，階層的，また使用領域に関しても拡大していく。ドイツ語圏では（ゴットシェート式）東中部変種が全地域に広がったのはやっと18世紀後半になってからであり，その使用者も18世紀末までは少数の教養のある市民階層に限られていたが，19世紀に教育などを通じて階層を越えて浸透していく。

4）標準語化プロセスの理念上の最終目標は，あらゆる場面で標準語が使用されうる状態となり，しかも共同体の全構成員が標準語をマスターすることであるが，ヨーロッパではどの言語もまだこの段階には達していない。実際にはむしろ標準語の浸透とともに，そこに地域方言や社会方言の特徴の一部が取り込まれることによって，標準語の内部に使用領域上の多層化が起こる。この多層化は，いわばかつての言語変種間の関係をより高いレベルで再現したものである。

ドイツ語圏において，日常語，とりわけ標準語に近い日常語といわれている変種が形成される背景には，Mattheier (1997) のいうこの標準語自体の多層化があると考えられる。すなわち，規範に縛られない気楽な場面での会話において，標準語がもっている広い通用性をある程度保ちながら，同時にかつての方言が担っていた，会話する者同士の親しみの表明や地域的・社会的アイデンティティーの確認という機能をも果たすために，日常語が生み出されたと言えるのである。

標準語のコード化はつねにエリート知識階層によって行われ，そのさい現実的な言語使用の実態よりも歴史的・語源的な正当性が追求されるため，そのようにして創り上げられた規範は，限られた教育しか受けられない階層の人たちには充分使いこなせないことになる。こうした事情から，19世紀末以来，いくつかのヨーロッパの言語において，コード化された標準語の妥当性に対する疑問が投げかけられ，結局，標準語の方が実際に使用されている口語に近づいていくことになるが[9]，この現象を Mattheier (1997：7) はチェコの言語学者 Daneš に従って「脱標準語化 (Destandardisierung)」とよんでいる。ドイツ語標準語の多層化，あるいは日常語の発展が，この脱標準語化に向かうのかどうかという問題は，現代ドイツ語に見られる規範的文法と話し言葉における実態との乖離をどのように解決するのか，という問題につながるであろう。

4 英語諸変種とドイツ語日常語

ここまで論じてきたように，ドイツ語の日常語はそれ自身さまざまな変種を含みうるものであるし，標準語や方言との境界も必ずしも明確ではなく，全体を一つの統一体として記述することは当然できない。しかしこれでは，日常語はあまりにも漠然としすぎて，その特徴を捉えることができないので，ここではまず非ドイツ語話者にとって最も重要な日常語の種類を，以下の Barbour/Stevenson (1990: 133-141) の説明に従って，英語の諸変種との比較をとおして絞り込んでみたい。

ドイツ語で標準語と言われる変種，すなわち文法書に記述され，学校で教えられる変種は，ほとんど書き言葉的なものであって，話し言葉としては公的な使用領域でしか使われない。ゆえに，それは英語のいわゆるフォーマルな標準語に相当する。そして，インフォーマルな使用領域で話される口語的標準英語 (colloquial standard English) に相当するのが，ドイツ語の日常語の中の標準語に近い変種なのである。つまりドイツ語の日常語には，英語では標準語のカテゴリーに入るものから，非標準語のカテゴリーに入るものまでが含まれていることになる。この言語変種間の関係におけるドイツ語と英語の間の用語の対応関係を示したのが次頁の表2である。

口語的標準英語の特徴の例として Barbour/Stevenson (1990：134) が挙げるのは，フォーマルな標準語の 'the consumption of alcohol was high' や 'he has not seen it' という表現に対する 'people drank a lot' や 'he hasn't seen it/ he's not seen it' に見られるような，抽象的な語の回避や動詞句の縮約で

表2　ドイツ語と英語の用語のちがい
Barbour/Stevenson (1990 : 141) より
A　ドイツ語
B　英語の一般的用法
C　Barbour/Stevenson (1990) の用法

A	B	C
Standardsprache	standard language	formal standard
Umgangssprache		colloquial standard
	(non-standard) dialect	colloquial non-standard
Dialekt		(traditional) dialect

ある。これに対して，口語的非標準語(colloquial non-standard) の特徴の例としては，'I seen him' の seen のような過去形や 'I didn't drink no beer' のような二重否定形が挙げられている。

Barbour/Stevenson (1990 : 135-136) によれば，これまでほとんど注目されてこなかったが，口語的標準英語に相当する，口語的標準ドイツ語(colloquial standard German) とよぶべきものが日常語の中に存在する。それはドイツ語圏の異なった地域の者同士が気楽に会話をするさいに用いる言語変種で，確かに英語よりも地域差は大きいけれども，英語ほど階層等の社会差はなく，特に文法においてはかなりの統一性を示す。ただし，この変種を母語とする者の割合が，北ドイツではイギリスとほぼ同じくらいであるが，ドイツ語圏南部においてはイギリスのどの地域よりも少ない。

ドイツ語学習者は，英語圏ほどの統一性はないとはいえ，フォーマルではない場面の話し言葉として一般的に用いられるドイツ語の特徴を知らなければ，適切なコミュニケーションをとることができない。以下，次章では，非常に概略的にではあるが，Barbour/Stevenson (1990 : 151-168) に基づき，口語的標準ドイツ語を中心に，音韻・音声および文法に関する日常語の特徴を見ていきたい[10]。

5　日常語の特徴

口語的標準語は，次の点においてドイツ語標準音 (deutsche Hochlautung) との音韻的 (一部音声的) 相違を示す[11]。以下，北部，中部，南部はドイツ語圏における地域を表す。

(1) sagte, Weg などにおける語末や子音の前の g /k/ が，北部と中部で /x/あるいは /ç/となる。

(2) sprechen, Stein などにおける語頭の /ʃp-/や /ʃt-/ が，北部で /sp-/, /st-/ となる。

(3) sagt, Bad などいくつかの語において，緊張母音が北部で弛緩母音になり，/zaxt/, /bat/ となる。

(4) Pferd, zwei などにおける /pf/, /ts/ が，北部と中部で /p/, /t/ となる。

(5) 本来硬音である無声閉鎖音や無声摩擦音が語中で軟音化し，例えば Ratten, Hafenの [-t-], [-f-] が，[-d̥-], [-v̥-] あるいは [-d-], [-v-] と発音される。ただし，これは北部ではあまり好まれない。

(6) kosten, lispeln などにおける語中や語末の /st/, /sp/ が，南部で /ʃt/, /ʃp/ となる。

(7) 標準音の /ç/が，南部で /x/ となる。

(8) アクセントのない音節の母音が弱化して /ə/となるか，あるいは ich lauf' のように脱落する。

口語的標準ドイツ語の文法上の特徴としては次のものが挙げられる。

(9) 指示代名詞が，特に強調を表すことなく，三人称代名詞として用いられる。

(10) 属格は用いられず，所有表現には前置詞 von が用いられ，属格支配の前置詞句には与格が用いられる (例：wegen dem Lärm)。

(11) 接続法第一式は用いられず，接続法第二式 (次項参照) で代用される。間接話法では直説法が用いられる。

(12) 接続法第二式に関しては，haben, sein, werden や müssen などの話法の助動詞はよく用いられるが，その他の動詞は一部をのぞきほとんど用いられず，würde ＋不定詞で代用される[12]。

(13) 過去形に代わって現在完了形が用いられる。そもそも過去形自体が，haben, sein, werden, sagen, wissen や話法の助動詞以外にはほとんど用いられることがない。この点に関しては地域的な相違が見られ，南部では過去形がまったく現れないか，現れてもせいぜい haben と sein のみである[13]。

以上が口語的標準ドイツ語のおもな特徴であるが，これらは本来なら学習書に体系的に記述されていなければならない事柄である。ドイツ語学習者は，場面に応じた適切なコミュニケーションを図るためには，音声・音韻上の特徴に関しては少なくとも受動的な知識を，文法上の特徴に関しては能動的な知識を身に付けなければならないであろう。文法書の記述どおりに属格や接続法第一式を日常の会話に用いても，それはまるで論文の朗読のような堅苦しい表現と受け取られてしまうのである。

これに対して，次に挙げる特徴は，日常語においてよく見られはするものの，かなり方言性が強く，一般に非標準語的なものと見なされている。①～⑤が発音上の，⑥～⑫が文法上の特徴である。

① gut などにおける語頭や語中の /g/ が，/j/ または /ʒ/ となる (北部と中部)。

② ich などにおける /ç/ が，/ʃ/ となる (北部と中部)。

③ See, Genie などにおける語頭の摩擦音 /z/, /ʒ/ が，無声化して /s/, /ʃ/ となる（中部と南部）。

④ 前舌円唇母音が円唇性を失い，Hüte, schön などにおける /y:/, /ø:/ が, /i:/, /e:/ となる（中部と南部）。

⑤ laufen などにおける語末音節の /-ən/が, /-ə/ となる（中部と南部）。

⑥ 'dem Mann sein Kopf'（=der Kopf des Mannes）のような「与格＋所有形容詞」型の所有表現が用いられる。

⑦ 与格と対格の区別が失われて，一つの斜格になる（北部）。この斜格形は人称代名詞の一部で標準語の与格と同形となるため，例えば 'sie ist da, ich hole ihr' の ihr のような標準語としては誤った語形が生じる。

⑧ 北部では定冠詞の男性形と複数形が同形となるので，標準語の同語尾式の名詞の複数形が語尾 -s で表される。例：単数 de Bäcker，複数 de Bäckers。

⑨ 上の⑤と関連して，冠詞と形容詞において，男性形の主格と対格の区別が失われ，例えば定冠詞では de に融合する（南部）。

⑩ 'er sieht' に対する 'er tut sehen' のような tun ＋不定詞による迂言形が用いられる。

⑪上の⑫と関連して，接続法第二式の würde ＋不定詞の代わりに，täte ＋不定詞がよく用いられる。

⑫上の⑬と関連して，過去形が消失した南部において，過去完了形に 'ich habe gesagt gehabt' のような二重完了形が用いられる。

6 おわりに

日常語の研究は，語学教育にとって重要な意味をもつだけではなく，言語学的にも新しい方向性を含んでいる。最後に，その中の一つを紹介して，本稿を終えたい。

ドイツ語に限らずどの言語にもサブスタンダードと見なされている日常的な言語変種が存在するが，新しい研究の方向として，多くの言語の日常変種に見られる普遍性を探るという視点がある。Hinrichs（1994：100）は，いわゆるバルカン言語圏に共通する言語特性（Balkanismen）の多くが，他の諸言語のサブスタンダードな変種にも見られるという事実に着目し[14]，次のような仮説を立てている。すなわち，多言語状態であった中世のバルカン地域において，ある口語的な統語上の規範が浸透していたが，これが後に体系化され，この地域のそれぞれの近代標準語の中に取り入れられた。Hinrichs（1994：108）によれば，分析的な言語構造をはじめ口語の特性は，認知的プロセスに適ったものだが，さまざまな理由からそれがコード化されなかったヨーロッパの他の地域では，日常語や方言の中に残っているのである。

上述したように，日常語はコード化された言語変種ではないので，流動的な側面をもっている。もし各言語の日常変種の統語上の特徴に普遍性が見られるとするならば，その普遍的な特徴が，変化しつつある日常変種の中で，今後どのように扱われるのか，つまり標準語の中に取り入れられるのか，あるいは日常変種の中にとどまるのか，という問題は，言語変化の内在的要因を探る上で注目すべきテーマになるであろう。

注

1 この Umgangssprache の概念規定に関しては，特に Conrad 1985; Bichel 1980; Mihm 1990: 48-49; アモン 1992：127を参照。

2 ふつう「ベルリン方言」と訳される Berlinisch/Berlinerisch も Mihm（1990）では日常語として扱われている。

3 ただし，後に見るように，Barbour/Stevenson（1990）は超地域的な日常語の存在を認めている。

4 Veith と Schönfeld の区分の仕方に関しては，おもに Barbour/Stevenson（1990：140）を参照。

5 Berlinisch の例，括弧内は標準語：wat（was), ick（ich), Tach（Tag)。

6 言語変化におけるこのような日常語の役割は，日本における中間方言に類似している。この点に関して，例えば地方分権的なドイツと中央集権的な日本とでは，中間的な言語変種のもつステータスがどのように異なるのかを探ることができるならば，興味深いであろう。

7 スイスでは，私的な場面で方言を話さない者は部外者だと見なされる。それゆえ，フランス語やイタリア語，レトロマンス語を母語とするスイス国民がせっかく標準ドイツ語を習得したとしても，ドイツ語圏スイスにおける言語生活に対応できないという問題が生じる（Weisgerber 1996: 265)。

8 ウェールズ語やブルトン語，バスク語，オクシタン語など，イギリスやフランスにおける少数言語の地位の上昇をめざす運動も，明らかにこれと関連しているであろう。

9 最も典型的な例は，現代ギリシャ語におけるカタレブサ(純正語)とディモティキ(民衆語)の対立であろう。なお，Reiter u.a.（1994）は，コード化されてはいないが実際に通用している言語変種を指すサブスタンダードという概念を共通テーマに掲げて，東ヨーロッパと東南ヨーロッパの諸言語における標準語とこのサブスタンダードの関係を扱った論文集である。

10 語彙に関しては，Braun（1993：25-36）を参照。そこでは旧東西両ドイツの代表的な辞典の間で「日常語的（umgangssprachlich)」とマークされた語にどのような相違が見られるかを調査した研究も紹介されている。

11 Auer（1997：136）によれば，特にこの数十年来，標準音に従うことが威信をもつのはニュースアナウンサーだけであって，政治家，ジャーナリスト，大学教員，俳優ではそうではない。

12 例えば saufen の接続法第二式 söffe などの口語での使用は滑稽であり，ジョークとしか受け取られない（Barbour/Stevenson 1990: 166)。

13 過去形の消失とその現在完了形による代用に関しては，田村（1995）を参照。

14 例えば，バルカン的言語特性の一つである付加語的与格に対応するものとして，上述の日常語の特徴⑥でも挙げたドイツ語方言の「与格＋所有形容詞」が挙げられている（Hinrichs 1994: 104)。

参考文献

ウルリヒ・アモン (1992) :『言語とその地位』(檜枝陽一郎・山下仁訳) 東京：三元社.

Auer, Peter (1997): Führt Dialektabbau zur Stärkung oder Schwächung der Standardvarietät? Zwei phonologische Fallstudien. In: Mattheier, K.J./ Radtke, E. (Hrsg.) 1997: 129-161.

Barbour, Stephan/ Stevenson, Patrick (1990): *Variation in German.* Cambridge: Cambridge UP.

Bichel, Ulf (1980): Umgangssprache. In: Althaus, Hans Peter u.a. (Hrsg.), *Lexikon der Germanistischen Linguistik. 2. Auflage,* Tübingen: Max Niemeyer: 379-383.

Braun, Peter (1993):*Tendenzen in der deutschen Gegenwartssprache. 3. Auflage.* Stutttgart: Verlag W. Kohlhammer.

Clyne, Michael (1995): *The German language in a changing Europe.* Cambridge: Cambridge UP.

Conrad, Rudi (Hrsg.) (1985): *Lexikon sprachwissenschaftlicher Termini.* Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.

Goebl, Hans u.a. (Hrsg.) (1996): *Kontaktlinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung. 1. Halbband.* Berlin: Walter de Gruyter.

Hinrichs, Uwe (1994): Balkanische Konvergenz und das Standard/Nonstandard-Problem. In: Reiter, N. u.a. (Hrsg.) 1994: 96-113.

Kloss, Heinz (1978): *Die Entwicklung neuer germanischer Kultursprachen seit 1800. 2. Auflage.* Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.

Löffler, Heinrich (1994): *Germanistische Soziolinguistik. 2. Auflage.* Berlin: Erich Schmidt Verlag.

Mattheier, Klaus J. (1997): Über Destandardisierung, Umstandardisierung und Standardisierung in modernen europäischen Standardsprachen. In: Mattheier, K.J./ Radtke, E. (Hrsg.) 1997: 1-9.

Mattheier, Klaus J./ Radtke, Edgar(Hrsg.) (1997): *Standardisierung und Destandardisierung europäischer Nationalsprachen.* Frankfurt am Main: Peter Lang.

Mihm, Arend (1990): Die Bedeutung des Niederdeutschen für die Umgangssprachen Norddeutschlands.『京都ドイツ語学研究会会報』4，46-61.

Otomo, Nobuya [大友展也] (1990): Das Verhältnis der deutschen Muttersprachler zur eigenen Umgangssprache, beobachtet im Raum Tübingen.『ノルデン』27，79-86.

Reiter, Norbert u.a. (Hrsg.) (1994): *Sprachlicher Standard und Substandard in Südosteuropa und Osteuropa.* Wiesbaden: Harrassowitz.

田村建一 (1995)：「ドイツ語と他のヨーロッパ諸語における過去時称としての現在完了形」,『ドイツ文学研究』27 (日本独文学会東海支部)，217-228.

Weisgerber, Bernhard (1996): Mundart, Umgangssprache und Standard. In: Goebl, H. u.a. (Hrsg.) 1996: 258-271.

(平成11年9月10日受理)